



付 27 話 学科に LAN を張る

今回は、およそ 25 年前、建築学科内に LAN(Local Area Network)を張ったお話しをする。コンピュータオタクは、コンピュータに関して何でも一番でなければ気が済まない。大学には計算機センターはあったが、建築学科の学生はほとんど使用しておらず、研究室で多少 PC を使うという状況であった。当時、数値計算法と FORTRAN によるコンピュータプログラミングの基礎をカリキュラムに組み込んでいた。構造実験室の一部を改装し、十数台の端末を用いて教育を行う。高学年の開講であるため受講者は少なく、この程度の教育環境でも充分。しかし時代の流れで、コンピュータリテラシとコンピュータを使った建築教育を進めなければならない。まずはインフラ整備のため LAN を張ることにした。

大手の設計事務所やゼネコンの設計部では、既に CAD による設計が始まっている。建築学科でも、コンピュータの基礎教育とコンピュータを用いた建築教育をすべく準備を始める。コンピュータネットワークは大学も他学科も未だ構築していない。建築学科が最初に LAN を張り、コンピュータ教育の先駆けになろうと思った。ただ、M 先生は他大学に教授として転出しており、自力で予算を確保しなければならない。

私学助成と学科費用を用いて、ネットワークを構築する。予算獲得のため、学科内のうるさ方を回り、説得する。個性豊か、つまり変わり者が多いので説得もままならない。デザイン系と技術系の先生では価値観がまるで違う。個人経営の店主と中小企業の技術者に似ている。無論、デザイン系は前者、個人の感覚や価値観が優先し、個別に動く。そのため群れることはめったにない。建設系と一括りにされるが、土木と建築では、やはり価値観が大いに異なる。同じ技術者でも、大企業と中小企業ほどその感覚は異なる。土木は国家を背負うと自負し、職域を超えて何事も団体で動く。その点、建築技術者はデザイン系に近いのかもしれない。これらは全て私の個人的見解であり、偏見が混じる。

我が建築学科デザイン系の先生方は特に個性的、わがまままで他人に同調することはまずない。建築学科はデザイン系に属する設計・計画系、歴史・意匠系があり、技術系には構造系と材料・生産系、環境・設備系がある。ここで、デザイン系で特に個性豊かな先生を紹介しよう。

Ka 先生の専門は建築史、寺院建築の実測調査を行い図面を起こす。ただし査読付き論文は見たことがない。つまり、他の専門家の評価を得たことがない。問題は期末試験である。毎年、多数の不合格者を出す。

必修科目であり、単位がないと卒業ができず学生は必死の思い。学期末、研究室の前は人だかり、大騒ぎである。当時は再試験制度があり、受験料が必要となる。車が趣味なのか高級車に乗っている。口の悪い学生は、あれは受験料で買っていると噂する。後年、学生たちが学長に直訴した。講義内容とかけ離れた問題であると。学長から学科長に調査し、対処せよと指示。学科内では大問題となったが、結局、再々試験をお願いした。命令でなくお願いしたところが面白い。学科長が誰だったか思い出せないが、迷惑な話である。次のカリキュラム変更で、日本建築史は必須から選択になり、受講者は激減した。建築家にとって、建築の歴史を学ぶことは文化・政治、社会を知ることに関わり、重要科目の一つなのに。

U先生は建築設計が専門。教育者であり、実務家である。設計事務所を構えており、学生をバイトに使い実務設計を行っている。ゼミ生のオンザジョブ・トレーニングである。優秀な弟子が何人も育てている。校務には全く興味がなく、研究対象もない。研究室は物が溢れ、物置小屋状態。現実と設計は違うらしい。プライドが高く、教授昇格で常に足を引っ張る構造系の H先生に反感を感じている。私が学科長になり、重要なプロジェクトで参加依頼に行くと、即、断られた。理由は忙しい、やる義務はないとのこと。呆れたが、以後、相手にしないことにした。後年、助教授のまま退職した。他にも個性豊かな先生が多くいた。お話しすると尽きないので、また後日とする。

話を LAN 構築に戻そう。予算を確保する過程で、各系の希望を聞く。特に、設計系の要求は多めで、全体予算を圧迫する。必要とする設備は、透視図や図面を出力可能な大型カラープリンター、学生の図面を皆で評価するための高精度ビデオカメラと大型プロジェクターである。特に、ビデオを移す大型プロジェクターは RGB3 管式で、調整に時間がかかる。これらの設備がどのように使われ、成果を上げたか分からないが、設置後、教員一同で野球中継を観戦、大迫力で感動した。

LAN はイーサネット(Ethernet)、太い同軸ケーブルを使用、色が黄色だったのでイエローケーブルと呼ばれる、両端には端子が付いており、信号が行き来する。このケーブルを天井裏に敷設し、細いケーブルをこのケーブルに差し込む。そのケーブルを各研究室に引き込み、端部にルーターを繋ぐ。そこから各コンピュータに結合することになる。各研究室には、技術系には PC98、デザイン系には MAC を各 1 台、この予算で設置した。予算の都合で、イエローケーブルの敷設は自前、学生にケガをさせないため、自身が天井に昇り、ケーブルを引っ張り上げる。大変な作業。誤って天井板を踏み破り、施設部の若者に笑われた。